

『源氏物語』における「擬音語」

奈 部 淑 子

キーワード：オノマトペア、「擬音語」、表現効果、

音の大小、美的非美的

要 旨

『源氏物語』に用いられている「擬音語」は、「擬態語」に比べその数はかなり少なく、それによって表現されている音も、平安時代の「女流文学作品」という範囲でそれを考える場合、それが美的なものであるとは言えず、その使用についての積極的な説明はいまだなされていない。本稿は『源氏物語』において用いられている「擬音語」が、その音の大小や、その音が美的なものであるか否かという基準では説明できないものであること、それらは作者によって意図的に用いられているものであり、作者がその場面において描こうとするものを印象づけ、表現するにおいて効果を挙げているものであること、またそれらが単なる季節感の演出や背景音の描写として用いられているものではないことを、平安時代の他の和文作品との比較を行いながら明らかにし、『源氏物語』における「擬音語」の使用に積極的な説明を与えるを試みるものである。

はじめに

・ 衣の音なひ、はら〜ととして、若き声ども、にくからず。
(帚木巻)

・ 御門守、寒げなるけはひ、うす〜き出で来て、とみにも、えあけやらず、これより外の男、はた、なきなるべし、こほ〜と引きて、
(朝顔巻)

・ 二人して、栗やなどやうの物にや、ほろほると食ふも、聞き知らぬ心地には、かたはら痛くて、しぞき給へど、
(宿木巻)

語音によって「音」や対象となる事物の状態を写していると解釈される、あるいは語音によって感覚的印象を呼び起こす語彙を、ここで「オノマトペア」*と呼ぶことにし、右に挙げた、「はら〜と」や「こほ〜と」、「ほろほると」など、「音」を写していると解釈されるものを「擬音語」、対象となる事物の状態を写していると解釈されるものを「擬態語」と呼ぶことにする。

本稿では、『源氏物語』において用いられている「擬音語」を対

象として、その使用において働いていると考えられる作者の意図、それらが作品の中で果たしている役割、その表現効果について、平安時代の他の和文作品と比較をしながら考察を行う[※]。

一

平安時代のオノマトペアについての研究には、既に山口仲美氏の論がある[※]。山口氏は幅広い調査を行い、文体という観点から和文資料(『源氏物語』を中心とする女流文学作品)に現れているオノマトペアを分析し、これまで平安時代の和文資料にはオノマトペアはあまり用いられていないとされてきたが、それは誤りであること、オノマトペアが目立った印象を与えないのは、女流文学作品の「典雅な世界」を損なわない「擬態語」が多用されているためであること、『源氏物語』における「擬音語」は小さな物音を写しているものが中心であり、大きな物音を写しているものは状況描写上、やむを得ず使用されたものであること、などを明らかにしている。この山口氏の論を参考に考察を進めていきたい。

山口氏は『源氏物語』における「擬音語」と「擬態語」の用例数について、オノマトペアの延べ語数二三〇例中、「擬音語」は僅か十五例であると指摘し、つぎのように述べている。

源氏物語は、擬音語をできるだけ排除し、騒々しく卑俗な作品の世界になることを避けた。わずかに用いられる擬音語も、小さな幽かな物音や声であった。多く出現する擬態語は、積極的に美化の方向をめざしてつくられ選ばれた語詞群であった。源氏物語の象徴詞は、総じて、しめやかな作品の世界をつくるのに寄

与する美的な性質をもつ語彙なのである。

『平安文学の文体の研究』p. 354～355)

また、山口氏は『源氏物語』に用いられている「擬態語」の性質について詳細な分析を行い、『源氏物語』には非美的な状態を形容する「擬態語」の用例が見当たらないことを指摘し、「擬態語」が人物造型や人柄の描写に効果的に活用されているとして、以下のよう

に述べている。

源氏物語は、一語一語を全体の構想の中で見きわめ、位置付け、操作している。一語一語が、一つの緊張した意味の世界をめざして、緊密に結びついて行く、これが、源氏物語の表現ではあるまいか。

『平安文学の文体の研究』p. 374)

山口氏のこの説に異論はない。しかし、このように述べながら、氏が『源氏物語』に用いられている「擬音語」について十分に言及していないことに物足りなさを感じる。『源氏物語』において「擬態語」が意図的に、効果的に用いられているとするならば、同じ「オノマトペア」という語彙に属する「擬音語」が、ただ「状況描写のため、やむを得ず」用いられているとは考えにくい。「擬態語」に比べ、「擬音語」の使用には消極的であったという説明だけでは不十分であり、「擬音語」も「擬態語」と同様、何らかの意図をもって用いられているという可能性を検証してみるべきではないだろうか。

そこで平安時代の和文資料における「擬音語」と「擬態語」の出現状況を調査し、延べ語数で比較してみたところ、「擬態語」に対し「擬音語」の用例数が、八対一^{※4}と、かなり少ないことが分かった。これは「擬態語」に比べ「擬音語」は象徴性が高く、語音によっ

て呼び起こされる感覚的印象がより強く直接的なものであるため、「擬態語」よりも俗語的であからさまな、どちらかと言えば品位に欠ける語彙として捉えられていたためであると考えられる。「擬音語」と「擬態語」の間に明確な境界線を設けることは難しく、またオノマトペアと一般語彙との間も同様であるが、仮にこれらを区分し得るものであるとすると、「擬音語」から「擬態語」になるとその象徴性は低下し、語音によって呼び起こされる感覚的印象の直接性は薄れていく。このため平安時代の和文資料において、より一般語彙に近いところにあった「擬態語」は頻用されたが、「擬音語」はあまり用いられなかったであろう。『源氏物語』においても「擬態語」は二百例以上用いられているが、「擬音語」は僅か十四例[※]を数えるのみである。本稿では、この十四例の「擬音語」が作品中でどのように操られ、どのような効果を生み出しているのかを考えていく。

具体的な考察に入るまえに、ここで『源氏物語』における「擬音語」がどのように用いられているのかを確認しておきたい。つぎの表(A)に「擬音語」が用いられている巻、その音を聞いている人物、何の音が描写されているか、またその音の大きさを示した。この(表A)では、『源氏物語』における「擬音語」を、その使用における作者の意図に従ってⅠ～Ⅲに分類した。Ⅰに属するものは、その「擬音語」を、その音をたてている人物の状態・その音を聞いている人物のおかれている状況を象徴的に表現するために用いていると考えられるもの、Ⅱに属するものは、その「擬音語」を、その場面における登場人物の心理状態を表現するために用いていると考えられるものである。またこのⅠ・Ⅱに属するものの中には、作品

全体におけるその場面の位置を認識させる効果をも生み出していると考えられる例がある。Ⅲとしたものは、その使用において何らかの意図が働いていると思われるが、Ⅰ・Ⅱのような表現効果があるように思われないものである。

§ 『源氏物語』における「擬音語」(表A)

Ⅲ	Ⅱ														Ⅰ		
	n	m	l	k	j	i	h	g	f	e	d	c	b	a	擬音語	巻	
そよそよと	さらさらと	ひしひしと	ねうねうと	つふつふと	つふつふと	つふつふと	こほこほと	ひしひしと	ほろほろと	そよそよと	こほこほと	からからと	こほこほと	はらはらと	帯木	聞く人物	
浮舟	浮舟	総角	若菜下	若菜下	野分	紅葉賀	夕顔	光源氏	宿木	若菜上	朝顔	賢木	光源氏	光源氏	光源氏	描写されている音	
道方	匂宮	辨の尼	柏木	小侍従	夕霧	光源氏	光源氏	光源氏	薫	夕霧と柏木	光源氏	光源氏	光源氏	光源氏	唐臼をひく音	音の大小	
衣ずれの音	伊豫簾の鳴る音	忍び渡る足音	子猫の鳴く声	胸の鳴る音	胸の鳴る音	屏風をたたむ音	板敷を踏む足音	粟などを食べる音	衣ずれの音	錆びた錠を開ける音	花皿のふれあう音	花皿のふれあう音	花皿のふれあう音	花皿のふれあう音	花皿のふれあう音	花皿のふれあう音	花皿のふれあう音
小	小	小	小	小	小	大(?)	小	小	小	小	大	小	大	小	小	小	小

※ 子音の清濁の判断については、推定の域を出ないものが少なくないため、一律に濁点を付していない。また用例には a ~ n まで記号を付し、その使用において働いていると考えられる作者の意図によってⅠ～Ⅲに分類した。

『源氏物語』における「擬音語」は山口氏が示しているように、「擬態語」に比べその用例数は圧倒的に少ないが、少ないということから、その使用に消極的であったという説明だけでは不十分であろう。氏は「擬態語」と同じように「擬音語」も美的か非美的か、またその音が大きいか小さいかという視点から考察を行おうとしているが、この視点からでは『源氏物語』に用いられている「擬音語」を分析することは難しい。(表A)の「描写されている音」の欄に示したように、小さな音であっても例fの「ほろほると」によって写されている粟などを食べる音が美的なものであるとは言えず、例1の「ひしひしと」によって写されている忍び渡る足音は、美的か非美的かという判断基準では捉えられないものであると考えるからである。『源氏物語』において、「擬音語」によって写されている「音」が美的なものとして描かれているか否かはおそらくあまり問題ではなく、その「擬音語」が用いられている場面がどのような場面であるのか、その状況がどのようなものであるのか、それが作全体の中でどのように位置付けられるものであるのか、ということを吟味してみることが、『源氏物語』の中で用いられている「擬音語」を考えていくうえで必要な作業であると考える。以下では用例を挙げてその場面がどんな場面であるのかを考えながら論を進めていくことにする。

二

つぎに示すのは、『源氏物語』に認められる「擬音語」の最初の例である。

a 寢殿の東おもて拂ひあけさせて、かりそめの御しつらひしたり。水の心ばへなど、さる方にをかしくしなしたり。ぬ中家だつ柴垣して、前裁に、心とめて植ゑたり。風涼しくて、そこはかとなき蟲の聲く聞え、螢、しげく飛びまがひて、をかしき程なり。人々、渡殿より出でたる泉にのぞきゐて、酒飲む。主人も、「肴もとむ」と、こゆるぎの急ぎありく程、君は、のどやかに眺め給ひて、「かの、中の品に取り出で、いひし、このなみならんかし」と思しいづ。思ひあがれる気色に、きょおき給へる女なれば、ゆかしくて、耳とぞめ給へるに、この西おもてにぞ、人のけはひする。衣の音なひ、はら／＼として、若き聲ども、にくからず。さすがに、忍びて笑ひなどするけはひ、ことさらびたり。

(帚木巻)

急な方違えて紀伊守の館に滞在することになった光源氏は、紀伊守の館を観察し、値踏みしているのである。庭園の有様が光源氏の目を通して描かれている。季節と時刻が程よいころであるのも手伝って、風情のある庭に光源氏が不満を感じている様子はない。そこで光源氏は「雨夜の品定め」を思い出し、品定めで評価された「中の品の女」に対する若い青年らしい興味が頭をもたげ始める。光源氏はこれまで「中の品の女」に身近に接したことがないのである。未知の対象に対する好奇心は増すばかりであるが、いきなり無作法に相手の姿を見に行くわけにもいかない。そうなると湧き起こる好奇心を満足させる方法は、視覚以外の感覚を働かせることによって噂に聞いていた女の様子を察知するしかない。この場面ではその手

段として聴覚が動員されているのであり、光源氏が「耳とぞめ」て西おもてに居る女の様子を探ろうとしている、これはそういう場面である。果たして、初めて身近に、直接自分の聴覚で感じとった「中の品の女」に対する評価は、「にくからず」という語からも解るように、光源氏の期待を裏切るものではなく、「中の品の女」に対する興味がここで途絶えてしまうということにはならず、それは更に大きなものとなっていくのである。

平安時代の他の和文学作品を見渡すと、「はらはらと」という「擬音語」は『落窪物語』にも用いられており、ここに示した『源氏物語』の例と同様に衣ずれの音を写していると解釈されるものである。また『讀岐典侍日記』では、扇の骨を擦り合わせる音の描写に「はらはらと」が用いられている。これらの例から「はらはらと」という「擬音語」は、何かがこすれ合う微かな物音を写す際に用いられるものであったことが伺える。『源氏物語』帚木巻のこの場面において光源氏の耳に聞こえてくる「擬音語」をもって描写されている音が、いかにも落ち着きに欠ける騒々しい物音であったならば、光源氏の「中の品の女」に対する興味は途端に失せてしまったであろう。微かな衣ずれの音がどんな場面においても上品なものとして描かれていくわけではないが、ここでは、好奇心の虜になっている若い男の期待を裏切らないものとして描かれている。この場面において光源氏が耳にする音は、騒々しいものであってはならない。微かな、期待を打ち砕くようなものではない、好奇心を刺激するものであることが重要なのであり、そのために作者は聞こえてくる音として「衣ずれの音」を設定し、「はらはらと」という微かな物音を表す「擬音語」を用いていると考えられる。

物語にはこの後、光源氏の、空蟬、夕顔と、「中の品の女」に興味を持ち心魅かれ、藤壺宮の形代を求めて女性遍歴を重ねていく姿が描かれていく。光源氏が初めて「中の品の女」を知る、その場面において作品中で初めて「はらはらと」という「擬音語」が用いられているのが、単なる偶然であるとは思われない。これは限られた状況の中で、中流貴族階層に属する女という未知の対象に光源氏が初めて自身の評価を下す、という場面であり、今後の物語の展開を考えるとかなり重要な位置にあるものである。この場面で、光源氏が自身の聴覚によつて「中の品の女」の様子を知るということを印象的に描き出すために「擬音語」が意図的に用いられていると考えられるのである。この場面において、水の流れる音や虫の声なども光源氏の耳に聞こえていると考えられるが、それらの音を描写するのに「擬音語」は用いられておらず、衣ずれの音の描写に用いられているということからも、「中の品の女」に直接結び付くこの衣ずれの音がこの場面において他の音とは異なる存在であり、「擬音語」がそれを用いる場面を考慮したうえで配せられているものであると言える。また、物語全体の構成を考えたととき、その場面において用いられている「擬音語」が、その場面の全体における位置を強く認識させる効果を生み出していると考えられる例も認められるのである。右に挙げた例 a はこれに該当すると考えられる。このことは『源氏物語』の中で二番目に用いられている「擬音語」からも裏付けられよう。つぎにその例を挙げ、考察を続ける。

b 八月十五夜、隈なき月かげ、ひま多かる板屋、のこりなく漏り来て、見ならひ給はぬすまひのさまも、珍しきに、あかつき

近くなりけるなるべし。隣の家く、あやしき、賤の男の聲く、目さまして、

「あはれ、いと寒しや」

「今年こそ、なりはひにも、頼む所すくなく」

「お中の通ひも、思ひかけねば、いと心ほそけれ」

「北殿こそ、聞き給ふや」

など、言ひかはすも聞ゆ。いと、あはれなる、おのがじゝのいとなみに、起き出で、そゝめき騒ぐも、程なきを、女、いと恥づかしく思ひたり。艶だち、気色ばまん人は、消えも入りぬべき、すまひのさまなめりかし。されど、のどかに、つらきも憂きも、かたはら痛きことも、思ひ入れたるさまならで、わがもてなし・ありさまは、いと、あてはかに、児めかしくて、又なくらうがはしき、隣の用意なきを、いかなることゝも、聞き知りたるさまならねば、中々恥ぢかゞやかんよりは、罪許されてぞ、見えける。こほくと、鳴る神よりもおどろくしく踏みとゞろかす唐臼の音も、枕上とおぼゆ。「あな、耳かしがまし」と、これにぞ思さるゝ。なにの響きとも聞き入れ給はず、「いとあやしう目さましき音なひ」とのみ、聞き給ふ。くだくだしき事のみ多かり。白妙の衣うつ砵の音も、かすかに、こなた・かなた聞きわたされ、空飛ぶ雁の聲、取り集めて忍びがたき事多かり。端近き御座所なりければ、遣戸を引きあげ給ひて、もろともに見出だし給ふ。ほどなき庭に、ざれたる呉竹、前裁の露は、猶、かゝる所もおなじこときらめきたり。蟲の聲く、みだりがはしく、壁の中の蟋蟀だに、間遠に聞きならひ給へる御耳に、さしあてたるように、鳴き乱るゝを、中くさまかへ

て思さるゝも、御心ざしの浅からぬに、よろづの罪、許さるゝなめりかし。
(夕顔巻)

これは夕顔の宿で朝を迎えた光源氏の耳に飛び込んでくる「音」である。まず聞こえてくるのは、隣近所に住む人々の生活臭に満ちた会話であり、夕顔が「いと恥づかしく」思っている様子が描写されたという状態であるから、先に挙げた例と同様に視覚は働いておらず、聴覚から五條の場末に住む人々の日常生活の実態を初めて知る、という場面である。これまでも夕顔の宿を幾度か訪れ、その様子を知ったようつもりでいた光源氏が、自身の属する上流貴族階層との生活の根本的な相違を思い知ることになる。どんなに取り繕っても隠しきれない、中流貴族階層の生活をリアルに、象徴的に表現しているのが、この「こほこほ」という「擬音語」なのである。雷鳴よりも恐ろしいくらいに、自身の寝ているすぐ枕上から聞こえてくるかと思われる唐臼の音。「あな、耳かしがまし」と光源氏は「これにぞ思さるゝ」のであり、「いとあやしう目さましき音なひ」とこの音を非常に不快なノイズとして聞いている。ここで光源氏が聞いている「音」について河添房江氏は、

夕顔巻の仲秋の夜、五条の場末で、光源氏が耳にした下衆たちの物音と話声、雷鳴よりも恐ろしげに響く唐臼や砵などの生活音など、和歌的心象におさまり切れない過剰なまでの音の喧噪は夕顔の隠れ家の庶民性をいかに象徴している。

『国文学 解釈と教材の研究』 第四十巻三号 p. 94
と述べており、『源氏物語』の中に描かれている聴覚現象が、和歌

的心象という文化的コードがその背景にあるものとして処理されてきたことを問題視し、またそれ故に「たくみに効果音を配した」夕顔巻が際だつとしてしている。河添氏の述べるように、この場面で唐臼の音だけでなく、下衆の会話、砧の音、雁の声、虫の声をすべてマイナスの評価を伴うノイズとして用いることによって、光源氏が初めて自身の属する階層とは異なる階層の実態を認識するという場面を印象的に描き出すことに成功している。

ここで示した『源氏物語』中で用いられている「擬音語」の最初の例と、二番目のマイナス評価を伴う大音を写した例は、その状況を描写するためにやむを得ず用いられている、というより、中流貴族という光源氏がそれまで知らなかった階層を徐々に知り、理解して行く段階を描くにおいて非常にたくみに、意図的に用いられていると考えられる。視覚を働かせることができないという状況において、聴覚を通してその場面を描写するということは、当たり前のように思われるかもしれない。しかし、「擬音語」が「卑俗な」、典雅な世界」を損なうものであり、可能な限り排除されたものであると考えるならば、「〇〇の音(声)が聞こえる」という表現でも十分なのであり、「擬音語」を用いないという選択肢も存在したはずである。「擬音語」を用いないという選択肢が存在した中で、敢えてこれを用いているということは、「擬音語」がやむを得ず用いられていたということを意味してはいない。『源氏物語』において「擬音語」は「擬態語」とは異なり、美的・非美的という視点から捉えられるような表現効果を意図して用いられているのではなく、その場面において描こうとするものを、より印象的に表現するために用いられているものであり、また、その場面の作品全体における位置

を認識させる効果を生み出す可能性を有するものであると考えられる。

さて、この「こほこほと」という「擬音語」は、『源氏物語』の中では他に二例認められる。ひとつは(表A)で例dとした朝顔巻の錆びた錠を開ける音を写したものであり、もう一例はhとした紅葉賀巻の屏風をたたむ音を写したものである。『源氏物語』において「こほこほと」は、三例とも比較的大きな物音を写したものでして用いられている。他作品をみても、『宇津保物語』では屏風や几帳が倒れる音、『蜻蛉日記』では雷鳴の轟く音、作者の眠りを破る船端を叩く音、『讃岐典侍日記』では部屋の調度品を移動させたり壊したりしている音の描写に用いられており、基本的に大きな物音、どちらかと言えば耳に不快な音を写したものとして用いられる「擬音語」であったことが伺える[※]。平安時代の和文資料をみても、大きな物音が「擬音語」によって写されることは多くなく、「こほこほと」という「擬音語」そのものが、「擬音語」として用いられるオノマトペアの中でも目立つ存在であったと考えられる。このような「擬音語」が『源氏物語』の中では三例用いられているのである。山口氏の述べるように、『源氏物語』の作品世界を損なわない「擬音語」が選ばれ、用いられていたのであるならば、「こほこほと」という「擬音語」はその資格を持たないものであり、排除されてしまふべきものであるうし、状況描写のためにやむを得ず用いられたものであるならば、作品中に複数用いられるであろうか。この場面において「こほこほと」という「擬音語」はやむを得ず用いられたというようなものではなく、それに伴うマイナス評価をたくみに利用して、年青光源氏が初めて自身の属する階層とは異なる中流貴

族階層の生活の実態を聴覚を通して知るといふ場面を印象的に描き出すという意図をもって用いられたものであり、光源氏の成長段階におけるこの場面の位置を認識させるといふ効果をも生み出していると考えられるのである。ここでも他に下衆の会話やあちこちから聞こえてくる砧の音、雁の声、虫の声などが耳障りなノイズとして描かれているが、「擬音語」が用いられているのは唐臼の音の描写のみであり他の音の描写には用いられていないことから、「擬音語」が焦点を絞って効果的に配せられていることが伺える。

ここに挙げた例の他にも、同様の効果を有する例がある。既に挙げた朝顔巻の錆びた錠を開ける「こほこほと」という「擬音語」は、桐壺院が亡くなった今となっては訪れる人もなく、荒れすさび、落魄の一端を辿るばかりの桃園宮の状態と、人の心・世の常ならぬことを象徴的に表している。賢木巻の例。「からから」とは、宮中を離れ、雲林院に滞在している光源氏が聞いている、法師達が花皿を洗う音を写したものであり、自身の生きる世界とは異なる世界の生活を象徴的に表しているものである。この場面では光源氏が仏門に心魅かれている様子が描かれている。また、例e若菜上巻において用いられている、女三宮方の女房達が猫の騒動に驚き身じろぐ様子を描写している「そよそよと」*7という衣ずれの音を写した「擬音語」は、嗜みや深い思慮に欠ける女三宮方の人々の有様を物語っているし、例f宿木巻に見られる、浮舟方の女房達が栗などを食べている音を写している「ほろほろと」という「擬音語」も同様であろう。『源氏物語』において貴婦人として十分な教養や立ち居振る舞いを身につけておらず、自らの意志を持っていない女性として描かれている女三宮と浮舟方の女房達の描写に、「擬音語」がマイナス

の評価を伴って用いられているということも興味深く、単なる偶然ではない、作者の意図を感じさせるものである。

『源氏物語』における「擬音語」は、その音をたてている人物の状態・その音を聞いている人物のおかれている状況を印象的に描き出すという意図をもって用いられているものであり、その場面の作品全体における位置を認識させるといふ効果をも生み出す可能性を孕んだものであると考えることによって、(表A)に示した用例a～fを説明することが可能になると考える。

三

それでは、つぎに、登場人物の心理状態を象徴的に表現することを意図して用いられていると考えられる「擬音語」について考察を行う。その例を示しておく。

g 夜中も過ぎにけんかし、風の、やゝ荒くしう吹きたるは。

まして、松のひゞき、木ぶかく聞こえて、気色ある鳥の空声に鳴きたるも、「鼻は、これにや」と、おぼゆ。打ち思ひめぐらすに、こなた・かなた、け遠くうとましきに、人声せず。「などて、かく、はかなき宿は取りつるぞ」と、くやしさも、やらんかたなし。右近は、物もおぼえず、君につと添ひたてまつりて、わなゝき死ぬべし。又、「これも、いかならむ」と、心そらにてとらへ給へり。われひとり、さかしき人にて、思しやる方ぞなきや。火は、ほのかにまたゝきて、母屋の際に立てたる屏風のかこみ、こゝかしこの、隈くしく、おぼえ給ふに、物

の足音、ひしひしと踏み鳴らしつゝ、後より寄り来る心地す。
 「惟光、とく参らなん」とおぼす。ありかさだめぬものにて、
 こゝかしこ、たづねける程に、夜の明るる程の久しきは、千代
 を過ぐさん心地し給ふ。
 (夕顔巻)

これは、「なにがしの院」において夕顔が絶命し、どうすることもできず困惑する光源氏の様子を描写した場面である。「なにがしの院」が非常に心もとない、薄気味悪い場所であることが鼻の鳴き声という効果音からも読み取ることができる。しかし、この場面において「擬音語」は、不気味に鳴く鼻の鳴き声を描写するために用いられてはおらず、実際には聞こえない、後から忍び寄ってくるように思われる何物かの足音を写したものと「ひしひしと」が用いられているのである。この場面において実際に聞こえてくる「音」ではなく、現実には聞こえていない「音」の描写に「擬音語」を用いることによって、現実には存在しない何物かが忍び寄ってくる足音がリアルに聞こえてくる気がするほど、光源氏が不安に苛まれ、怯え、平静を失ってしまっている心理状態にあることが描き出され、体中で感じている光源氏の恐怖感が浮き彫りにされるのである。

この足音は現実世界の物音ではなく、光源氏の心理状態から生まれた架空のものであるため、他の人間には聞こえないものである。このことは(表A)に示した例 i・j の「つつふと」胸の鳴る音も同様であり、本人にしか聞こえない音であると言える。このように当の人物にしか聞こえない音を「擬音語」をもって具体性を増して描くことよって、その人物の平静でない心理状態が克明に描き出されることになるのである。また、当の人物にしか聞こえないと

いう心理的な音に「擬音語」を用いた場合、「擬音語」の、直接的に感覚的印象に訴える機能が和らげられるのではないだろうか。『源氏物語』の中で用いられている「擬音語」十四例のうち三例が、周囲の人間には聞こえない音を写したものであり、この点にも作者の配慮が感じられるのである。

この例のように、登場人物の心理状態を描き出すのに効果を上げている例は他にも認められる。同じ「ひしひしと」が用いられている(表A)で1とした総角巻の例は、宇治の大君に内緒で薫を案内する辨の尼が、足音が大きに聞こえるのではないかと小さな物音にも心を砕いている様子を表現している。例 m とした浮舟巻の例は、匂宮が宇治に赴き浮舟をかい間見する場面で伊豫籬が「さくらさくら」と鳴る音を写しており、相手方に自分の存在を悟られないように心を砕き、微かな物音にも敏感になつていく匂宮の心理状態がよく伝わってくる。例 h とした紅葉賀巻の「こほこほと」は、暗闇の中で屏風をたたんでいる人物が誰であるか分からない、光源氏の不安感を煽る音として描かれている。右で述べた i・j の例、野分巻・若菜下巻の「つつふと」胸の鳴る音は、期待感や焦燥感の描写にストリートに結び付いていると言えよう。『源氏物語』において「擬音語」は意図的に配せられたものであり、その場面における登場人物の心理状態の描写にも、大きな役割を果たしていると考えられるのである。右で述べた(表A)でIIに属する例は、「擬音語」であるが登場人物の心理状態を描写するにおいて効果を挙げていると考えられるものであり、その機能から見ると「擬態語」、または「擬情語」に非常に近いものであると言えよう。

四

これまで、『源氏物語』における「擬音語」が、その場面において描こうとするものを印象的に表現するために用いられているものであり、その場面の作品全体における位置を認識させる効果を生み出す可能性を有するものであると考えられること、また、それが用いられている場面における登場人物の心理状態を象徴的に描き出していると考えられることを例を挙げ、その場面の解釈を加えながら述べてきた。

それではここで、『源氏物語』の中に用いられている「擬音語」が、どのような「音」を写したものであるのか、ということを考えてみたい。『源氏物語』において、雷鳴や風の音、波の音などの自然現象、季節を感じさせる鳥や虫の声などを写した「擬音語」は見いだせないのである。動物の声を写している例が一例認められるのであるが、この例は子猫の鳴き声を写したものであり(例k)、作品中で微に入り細に入る描写がなされている四季折々の季節感とは全く無縁のものである。このことは一体何を意味しているのだろうか。

「音」を伴う自然現象が作品中に描かれていないというのではないことは、須磨巻における激しい雷鳴、野分巻の嵐などを思い浮かべれば、すぐに誰もが気付くことであろう。また、作品中には「虫の声(音)」という言葉が幾度となく用いられているのも、周知のことであろう。作者は様々な自然現象を作品中に取り入れ、季節の移り変わりやその時節がらを描いているが、そこには「擬音語」そのものはい用いられていないのである。

そこで平安時代の他の和文学作品を見てみると、ここでは自然現象が「擬音語」を伴って描かれている。『蜻蛉日記』では雷鳴が「こほこほと」という「擬音語」で描写されており、『大鏡』では雉の鳴き声に「ほろほると」という「擬音語」が用いられている。自然現象音を「擬音語」でもって写しとることが行われなかったというのではないことが、他作品の例から伺える。それでは、なぜ、『源氏物語』においては「擬音語」が自然現象の描写に用いられなかったのだろうか。これについて山口氏は『蜻蛉日記』の例と比較しながら、以下のように述べている。

源氏物語でも、須磨の地で何日も続く暴風雨に見舞われ、雷鳴がとどろき、落雷しているが、雷の音をうつす擬音語は使用されていない。源氏物語は、大音をうつす擬音語によって典雅な作品世界がこわされることをおそれたのであろう。

『平安文学の文体の研究』 p. 345)

氏の述べるように、恐ろしく鳴り響く雷の大音は、「典雅な」ものであるとは言えず、「擬音語」をもってそれを表現することが避けられたということも考えられよう。しかし、大音でなく小さな物音でありながら、「典雅」であるとは言えない、むしろ庶民性や日常性、はしたなさを強く感じさせる物音が『源氏物語』中に「擬音語」を用いて描かれていることは、(表A)に示した例e・fから明らかである。また、微かな物音であるなら許容されたというのであるならば、虫の声や風の渡る音などを写した「擬音語」が用いられていてもよいのではないだろうか。

『源氏物語』において「擬音語」をもって描かれている物音は、その大小が許容の基準になっているのではなく、その大小が「典雅」

であるか「卑俗」であるかという属性にそのまま正比例するものでもない。「源氏物語」の中の「擬音語」をその音の大小や、「典雅な」ものであるか否かという観点から説明することはできないのではないだろうか。その「擬音語」が用いられている場面において何を象徴的に描き出しているのかということと、『源氏物語』の作品全体の構成を考慮したうえで、その場面の全体における位置とを考えてみる必要がある。

それでは『源氏物語』において自然現象が「擬音語」を用いて描かれていないのはなぜなのであろうか。「擬態語」のほとんどが美的な状態の形容に用いられているのであるから、「擬態語」のように多用することは難しかったとしても、その意志があれば「擬音語」も同様に「典雅な」作品世界を損なわないような耳に心地よい、プラスの評価がなされる音や声の描写に限定して用いることも可能であつたのではないだろうか。しかし作者は「擬音語」をそのように扱うことをしなかつた。先述したように「擬音語」には「擬態語」とは異なる、それによって形容されている人物の状態、あるいはその音を聞いている人物のおかれている状況や、そこにおける登場人物の心理状態に結び付けてその場면을印象的に描き出すという役割を背負わせようとしたため、その場面の背景を描写したり、季節感を演出するというような単純な用法を、敢えて避けていたと考えられるのである。このことは、平安時代の他の和文作品に認められる、和歌中において「擬音語」が掛詞的に用いられているという例が、『源氏物語』には見いだせないということからも裏付けられよう*。作者は「擬音語」をありきたりの、お決まりの掛詞として用いることも避けたと考えられるのである。同じオノマトペという語彙に

属するものであつても、「擬音語」と「擬態語」は『源氏物語』において、決して等しなみに捉えられていたとは考えられず、その表現効果における差異をよく認識し、その差異を作品中で有効に利用しているのである。

五

それでは、ここで、『源氏物語』中ただ一例の、動物(生物)の鳴き声を写していると解釈される「擬音語」について考察を行いたい。先に少し触れた、子猫の鳴き声を写したものである。つぎにその例を示す。

k つひに、これを尋ねとりて、夜も、あたり近く臥せ給ふ。あけたてば、猫のかしづきをして、撫で養ひたまふ。人げ遠かりし心も、いとよく馴れて、ともすれば、衣の裾にまつはれ、より臥しむつるゝを、まめやかに、うつくしと思ふ。いといたくながめて、端近くより臥し給へるに、来て、

「ねうく」

と、いとらうたげに鳴けば、かき撫でゝ、「うたても、すすむかな」と、ほゝゑまる。

「恋ひわぶる人の形見と手馴らせば

なれよ何とて鳴くねなるらん

これも、むかしの契りにや」

と、顔を見つゝ、のたまへば、いよく、らうたげに鳴くを、ふところに入れて、ながめ居給へり。御達などは、

「あやしく、にはかなる猫の、時めくかな」

「かやうなる物、見入れ給はぬ御心に」

と、とがめけり。宮より召すにも、まゐらせず。とりこめて、これを語り給ふ。
(若菜下巻)

これは柏木が、女三宮のところで見かけた子猫を、女三宮の実兄である東宮を経由してやっとの思いで手に入れ、恋しい人の形代に、日々「撫で養ひ」、語らい、東宮から返すように言われても手元において可愛がっているという場面である。あまりの可愛がりように女房達が不審に思っている様子が描かれている。女三宮は柏木が切望した女皇子であったが希望は叶えられず、六條院(光源氏)に降嫁された。それでも女三宮への思いを断ち切れなかつた柏木が、ひよんな偶然から思い人の姿を目撃するという場面が若菜上巻に描かれている。この、御簾を巻き上げるといふ偶然を生み出したのが、外ならぬこの子猫であったのである。恋しい人の姿を目にした柏木の思いはいや増し、せめてもの慰めにと当の子猫を入手し愛玩しているのであるが、この柏木と女三宮の関係を描くにあたって、「猫」が暗示的に用いられている。物語をもう少し読み進めていくと、ついに女三宮の女房小侍従の手引きで、二人が密会をもつ場面が描かれており、その後柏木が見る夢の中に猫が現れるのである。当時猫の夢は懐妊の予兆として捉えられていたようであるが、果たして、女三宮はそのとおり、柏木の子を生むことになる。

今述べたように、この二人の間に「猫」が介在するのは右に引用した場面だけではないのであり、この子猫はたまたま登場しただけの猫でないことを考えなければならない。この子猫が、柏木の手の

中で可愛らしく鳴いている、その鳴き声に「ねうねう」といふ「擬音語」が用いられているのである。繰り返しになるが、『源氏物語』において動物(生物)の鳴き声や自然現象が「擬音語」をもって描写されているのは、この一例のみである。この「ねうねう」が、これまで述べてきた「擬音語」と同様に、作者が何らかの意図をもって配したものであると考えると、その意図はどのようなものなのであろうか。

この「ねうねう」といふ「擬音語」は、注釈書等では「寝む、寝む」に掛けたものであるという説明がなされている。当時、「う」と表記された音が擬音であった可能性は十分に考えられるため、このような説明がなされているのであろう。だが一方で、「呂」といふ母音の連続が拗音として実現されていた可能性もあり、「ねうねう」が、そのまま「寝む、寝む」に置き換えられると断定することは難しい。しかし、この「擬音語」において重要なことは、柏木には「ねうねう」が、まさしく「寝む、寝む」と言っているように聞こえているという説がもつともらしく唱えられ、またそれが受け入れられているという点であろう。実際には疑問の残るこの説が、大きな抵抗もなく受け入れられているという事は、「ねうねう」を「寝む、寝む」と解釈しても何ら矛盾をきたすことがなく、むしろ、柏木の女三宮を恋い慕う心情を表現するにおいて高い効果が得られることに起因する。恋しい人の形代に無理に子猫を手に入れ、周囲の女房達が不思議に思うくらい、昼夜それを愛玩しているのであるから、その恋情、女三宮への思い入れは並々ならぬものであろうと誰もが感じる。「ねうねう」が「寝む、寝む」ではないにしても、女三宮の形代である子猫が何か物言いたげに語りかけてきていると考

えれば、柏木の思いが増していくのは自然なことであろう。この場面において柏木の感情が高まっているということは、柏木が和歌を詠んでいることから伺うことができる。せめてもの慰めにと手元に置いた子猫であったが、柏木の恋情は簡単に押さえられものではなく、いよいよ大きく膨らんでいくものであることがこの場面から読みとれるのである。

柏木の恋情がこれ以上大きくなることは、ある事件の出来を予感させる。社会的に許されない恋情が大きくなりすぎると、その結末は密通という不義に辿り着くことになるからである。『源氏物語』においては、既に光源氏とその義母である藤壺宮との密通が描かれているのであり、過去の出来事を思い起こし、第二の不義が行われるのではないかという懸念が芽生えるのである。光源氏にとっては因果応報とも言える第二の不義を予感させるこの場面において、「ねうねうと」という作品中唯一の動物の鳴き声を写した「擬音語」が用いられているのである。結果として、第二の不義は起こり、その後秘密を抱えることになる人物は、苦しく辛い人生を送ることになるのであるが、この場面は、過去の出来事とその顛末を踏まえたうえで、今後起こるかも知れない事件とその展開を予感させ、かつ今後の物語の行方を暗示している場面であると言える。「ねうねう」という子猫の鳴き声は、柏木の恋情の高まりを描き出し、読者にこの場面を印象づけ、今後の展開を暗示する効果の一端を担うものとして用いられていると考えられるのである。

ここで述べたように、『源氏物語』の中で唯一用の動物の鳴き声を写している「擬音語」は、登場人物の心理状態を印象的に表現しているものであり、また、物語全体におけるこの場面の位置を認識

させ、今後の展開を予感させるという効果を生み出す可能性も有しているものであると考えられる。この用法は自然現象や虫の鳴き声によつて季節感を描写したり、登場人物をとりまく自然の有様を表現するというようなものではなく、物語全体の構成を視野に入れたうえでの計算された、意図的なものであり、「擬音語」の直接性と象徴性を最大限に活かした用法であると考えられる。

六

これまで例を挙げて述べてきたように、『源氏物語』における「擬音語」は、単なる季節感の演出や背景音の描写として用いられているものではない。「状況描写のためにやむを得ず用いられている」というよりも積極的な説明が可能なるものであると考える。何らかの音を写している「擬音語」は、ある生活階層に属する人々の実態を象徴的に、また印象的に表現したり、登場人物のその場面における心理状態をたくみに描写するものであり、その場面の作品全体における位置を認識させる効果を生み出す可能性をも有するものとして機能しているのである。これは作者によつて意図的に操作されているものであり、『源氏物語』中十四例認められる「擬音語」のほとんどが、このように機能していると考えられるのである[※]。これまで例を挙げて説明を行わなかったものもあるが(例四)、それはまた、視覚が働かない状況において何らかの手掛かりを示すものとして機能しており、読者にその場面を印象づけるものであることは確かであると考える。

『源氏物語』中に用いられている「擬音語」は、その物音の大小

や、その音が美的なものとして描かれているか否かという基準では説明できないものであり、それらが意図的に用いられており、その場面で描こうとするものを印象づけ、表現するにおいて効果を挙げているものであることを本稿で明らかにすることができたと考えられる。

また、平安時代の他の和文学作品をみると、『落窪物語』のオノマトペア、特に「擬音語」の用いられ方には興味深いものがある。『落窪物語』の「擬音語」については山口氏も他作品との差異を認め、女流作品と男性の手になる作品との文体との違いを述べているが、それだけではない、作者の意図するところの相違によるものがあるのではないかと思われるが、今の段階では明らかに述べるだけの材料を持たない。本稿で十分な説明を加えられなかった例の考察とともに、今後の課題としたい。

注

※1 ここで「オノマトペア」と呼ぶことにした語彙は、様々な名称で呼ばれている。広く行われているものは、「擬音語」・「擬態語」であり、その他にも「擬声語」・「擬容語」・「擬情語」・「象徴詞」など、多くの研究者が自身の概念に基づいて、その定義や名称を明確なものにしようとして試みているが、未だそれをなし得ていない。そこで本稿では、「onomatopoeia」を、そのまま片仮名に置き換えて行われている「オノマトペア」という術語を用いることにする。「onomatopoeia」という語は、もともと、イエス・ペルセンのいわゆる「直接模倣」を表すものであるため、対象とされる事物の状態を写していると考えられる語にはそぐわない、とする向きもあるだろうが、ここで考察対象とする語彙は、既に先学によって述べら

れているように、「音」を語音によって写したものであるのか、対象とされる事物の状態を語音によって写したものであるのか、明確に一方に定められないものがあり、また場面によって両方に用いられる語も存在する。両者の間に確然たる境界線をひくことは困難であり、名称による混乱を避けるため、本稿では「オノマトペア」という語を、いわゆる「擬声語」・「擬音語」・「擬態語（擬容語）」・心理状態を表す「擬情語」を総称する術語として用いることとする。

つぎに「オノマトペア」と呼ぶことにした語彙の定義であるが、これも有効なものはない。オノマトペアであるか否かを判断する基準として、「連濁現象を起こさないこと」・「語基が派生関係をもたないこと」などが挙げられてきたが、どれも矛盾を含んでおり、有効な基準とは言えない。オノマトペアと一般語彙とを区別することは難しく、これは最終的に話者の主観に委ねられるものであると考えられる。オノマトペアの中には、私たちが聴覚でもって感知する「音」に非常に近い印象を呼び起こす語もあるが、対象とされる事物の状態を写す語になるとその抽象度は増し、抽象度が高くなるほど一般語彙に近づいていくと考えられるからである。そこで本稿では、従来判定基準とされてきた条件を一応参考にしたうえで、「オノマトペア」を、語音によって「音」や対象とされる事物の状態を写している、語音によって感覚的印象を呼び起こす語彙と定義する。

※2 本稿は『源氏物語』の中で用いられている「擬音語」について考察を進めていくものであるが、他にも『竹取物語』・『伊勢物語』・『大和物語』・『宇津保物語』・『落窪物語』・『堤中納言物語』・『大鏡』・『土佐日記』・『蜻蛉日記』・『和泉式部日記』・『紫式部日記』・『更級日記』・『讃岐公侍日記』・『枕草子』のオノマトペアの調査を行った。平安時代の和文資料を網羅することはできなかったが、おおよその傾向は得られるものと考えられており、その傾向を踏まえたいうえで、『源氏物語』における「擬音語」の用いられ方とその効果について私見を述べる。

※3 山口仲美氏の論文、「今昔物語集の象徴詞——表現論的考察——」(『王朝』五冊)・「平安時代の象徴詞——性格とその変遷過程——」(『紀要

共立女子大学短期大学部文科「十四号」・「源氏物語の語彙——象徴詞を中心にして——」（明治書院『古代の語彙』・「源氏物語の象徴詞——その独自の用法——」『国語と国文学』六十巻十号）に詳しく述べられている。なおこれらの論文は、『平安文学の文体の研究』に収録されている。

※4 参考資料として、今回調査した範囲で得られた結果を表にまとめたものを示しておく。これを（表B）とする。

※5 山口氏の調査では十五例とされている。末摘花巻の「むむと」を、山口氏は末摘花の笑い声と考え「擬音語」としているようであるが、これは現代語に置き換えると「うん、うん」と頷いている声であると解釈されるため、本稿では「擬音語」に含めなかった。

※6 『落窪物語』では「こほこほと」という「擬音語」は、腹を下した人物の腹の鳴る音の描写に用いられており、『枕草子』では雀を鳴らす音の描写に用いられているが、これらはそれぞれの作者・筆者の意図に基づいて用いられているものであると考える。

※7 この「そよそよ」という「擬音語」は、注釈書によつては「それよ、それよ」という意の会話として解釈しているものもあるが、本稿では山口氏と同様に、女房達の衣ずれの音を写した「擬音語」であると考える。

※8 参考資料として挙げた（表B）を参照のこと。

※9 （表A）でIVと分類した例は、積極的な説明を行うことが困難であると判断したものである。特に例nの浮舟巻の「そよそよ」とは、例を挙げ、解釈を加えながら説明を行ってきた例と比較すると、その効果が非常に軽いように思われるものである。例nだけでなく、宇治十帖で用いられている例e。「ほろほると」・例k「さらさら」とも、他の例に比べると同様の感を抱かせるものである。「擬音語」の用いられ方から、宇治十帖は作者が異なるという説を補強し得る可能性があるようにも思われる。

§ 参考資料 オノマトペアの出現状況（表B）

ジャンル	作品名	「擬音語」				「擬態語」				
		地の文	会話文	心話文	消息	地の文	会話文	心話文	消息	和歌
物語作品	竹取物語					5	5			
	伊勢物語					1				
	大和物語				2	11				1
	宇津保物語	2				3	39	8	1	
	源氏物語	13				196	15	6	1	1
	落窪物語	11	1			1	26	13		1
日記	堤中納言物語					10				
	土佐日記					1				1
	蜻蛉日記	12				1	28	1		1
	和泉式部日記					4				
	紫式部日記	1				11				
	更級日記				1	11				
随筆	讃岐典侍日記	2				22	1		1	1
	枕草子	9				54	2			
合計	50	1			8	419	45	7	2	6

※ 表中のブランクはゼロを表す。

参考文献

- 春日政治（一九二三）『奈良朝人の擬声語』 『奈良文化』第四号
 石黒魯平（一九五〇）『擬態語』の名稱を疑ふ 『言語研究』十六
 （一九六五）『擬音語と擬容語』 『言語生活』一七一
 亀井孝（一九七三）『春鶯囀』 『国語学』三九
 泉邦寿（一九七六）『擬声語・擬態語の特質』
 『日本語の語彙と表現』日本語講座4 大修館書店
 金田一春彦（一九七九）『擬音語・擬態語概説』

浅野鶴子『擬音語・擬態語辞典』所収 角川書店

鈴木雅子(一九八四)『擬声語・擬音語・擬態語』

『研究資料日本文法4』 明治書院

長谷川洋子(一九九一)『擬声語・擬態語について——物語り文学作品を

中心に——』『山梨大学 国語国文と国語教育』5

田守育啓(一九九三)『日本語オノマトペの音韻・形態的特徴』

『月刊言語』六月号

河添房江(一九九五)『源氏物語と聴覚』

『国文学 解釈と教材の研究』第四十卷三号 学燈社

○・イエスベルセン著 市河三喜・神保 格訳(一九二五)

『言語 その本質・発達及び起源』 岩波書店

小林英夫(一九五五)『言語学方法論考』 三省堂

山口仲美(一九八四)『平安文学の文体の研究』 明治書院

寛 壽雄・田守育啓編(一九九三)

『オノマトピア 擬音・擬態語の楽園』 勁草書房

使用テキスト

『竹取物語』・『伊勢物語』・『大和物語』・『源氏物語』・『落窪物語』・『堤

中納言物語』・『土佐日記』・『蜻蛉日記』・『和泉式部日記』・『更級日記』・

『枕草子』・『大鏡』は古典文学大系(岩波書店)により、『宇津保物語』は

古典文庫本、『讀岐典侍日記』は新古典文学全集(小学館)を使用した。